

編集室から

今年は、2月を前にして大雪が続く天候となっています。昨年は2月初旬と中旬に、積雪で車のタイヤが隠れそうなほどの大雪が降った写真が手元に残っていました。今月の表紙写真是、そんな大雪の合間に富山市から眺めた立山連峰で、嵐の間の見事な晴れ間でした。

能登地震が発災した2024年は、雪が少ない年で、助かりましたが、翌年と翌々年になる今年は、やや多めとなっている気がします。大雪の中でも、自宅周辺では、家屋の解体工事や、新築工事がされていて、携わっている方々は、大変だろうと思います。

もちろん、被災した道路の完全復旧工事、上下水道工事などインフラ工事にも大雪の影響が出るかもしれません。

比較的被災程度が軽かったと言われている七尾市内でも、先日やっと仮設住宅に入れた方も多い、ご自宅の公費解体は、その後になるため、再建はもっと遅くなることが確定的な状況です。

まして、震源に近く大きく被災した奥能登地域では、もっと深刻な状況が続いている。

また、震源から離れている金沢・富山でも、被災した地区がありますが、量的に少數なためか、ほとんど報道もされない状態です。

東日本大震災の発災は、15年前でした。それでもまだ、現地の完全復旧が成されていない地域が少なくないことを考えれば、能登が元のような状態に戻れる日は、未だかなり先のことなのかもしれません。

繰り返して申し上げますが、この先、4年後～14年後の間に確実に起こると予想されている南海トラフ巨大地震が万一発生してしまうと、その被害がどれほど壊滅的で、しかも復旧がまらないか。被災者なら身体感覚で迫ってまいります。真剣に備えてください。（は）



このニュースは、地域計画に携わる若手の技術者の参考となることを目的に発行を始めました。

その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2026/02
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp



2026/02
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

如 月



富山県富山市にて
by hama

復興するぞ！
能登・北陸

寄稿『医療の常識・非常識～マイナンバーカード～』

サンポート高松クリーチク 井垣 俊郎

マイナンバーカードは税金や保険料の負担を公平公正にするという名目で、国民全員に個人を特定する番号を振り当てるため平成二十八年から交付が開始されました。政府は様々な理由からマイナンバーカードを普及させようとしていますが、今は医療の分野で政府が何をしようとしているのかを私なりに考えてみました。決してこの分野に精通している訳ではないので、誤りがあればご指摘いただけた幸いです。

◎
政府はマイナンバーカードを使うことで、医療の分野では大きく二つのメリットがあると言っています。一つ目が『オンライン資格確認』です。これは一般の方にはピンとこないかもしませんが、医療事務を行う側にとっては大変ありがたい事です。日本は国民皆保険制ですが、転職や退職で変わる受診者の医療保険をいちいち確認する必要があります。こうした情報をオンラインでリアルタイムに確認できれば、事務負担や人件費の削減に直結します。ただ、政府の狙いはココではなさそうですね。

二つ目が『全国保健医療情報ネットワークの構築』です。日本では電子カルテ導入の際に統一規格にしなかったため、各医療機関で勝手に検査や処方が行われバラバラにデータが集積されてきました。全国民の過去の医療情報を全国すべての医療機関で閲覧する事が可能になれば、検査の重複を

濱の起業塾 ハリー『地域経営』の視点⑤』

公共事業の一つである道の駅の事業開発において、民間のマーケティング手法を採用する重要性を先月号の本欄で概観した。

各地で、超小規模な産直「コーナー」と、手作り民芸品が並べられただけの可もなく不可もなくといった特徴のない道の駅が乱立しているのは、基本的なマーケティングに基づく運営がなされていないからではないかと考えている。

ある地域で、道の駅の事業開発について、相談をいたいた時のことである。その地域の農協は驚くことに農薬化学肥料を一切使用しない自然農法を推進し、その技術を学ぶ塾まで開設。全国から塾生が集い、既に相当の人が卒業しているという。中には移住して、学んだ自然農法を実践している新規就農の方もいた。ところが地元民は、形が不格好で高い、自然農法産物には理解がなく、市場にも出せないし売れるしない。せっかく志を掲げて移住した若い農業者は、日々熱意を削がれていた。この状況を打開するには、自然農法産物の出口(販売)戦略を構築するしか無い。早速マーケティングに取り掛

防げるし、薬剤の過剰投与や副作用も避ける事ができます。そして二〇一二年五月に政府は『医療DXビジョン2030』を発表して、全国医療情報プラットホーム設立を宣言しました。これによると医療だけでなく介護や公衆衛生のデータまでも集約して、広くまとめて電子媒体に載せようとされています。しかし、まず誰のデータなのかを番号(マイナンバー)で特定できなければ話は一步も前に進みません。

ここからは私の推測です。政府の狙いはただ一点『医療費抑制』だと思います。データを集められれば、解析の手法は飛躍的に進歩していくことになりますから、より効率の良い医療行政の手が打てます。ただ疾患の発生や経過には民族差や地域差があるので、日本独自のデータは必須です。医療データ利用の先進国であるイギリスやフィンランドなどでは、ほぼ全国民の医療情報がデータベース化されています。一部は商用利用も可能になっているようです。アンドラントンでは、国民のゲノム情報まで集積され始めています。ゲノム解析が進めば、究極の予防医学も可能かもしれません。大幅に出遅れている日本政府は焦っていると思います。何が何でもマイナンバーカードを普及させると強く決意しているに違いありません。

◎

【プロフィール】（いがき　としお）金沢大学北溟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とっても怖かつた…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松でスクスクしています。



かる。類似業態と考えられる店舗に出向き、客筋を観察。自然栽培に価値を見出るのは、健康指向・自然指向が強い情報感度の高い層だった。ターゲットは、若い女性と決まりた（実際にはペルソナ分析も行っている）。道の駅運営の核となるチームや、行政担当者との議論にすえに、彼女たちに提供・提案する価値は、ナチュラルで健康に良い品揃えをおしゃれな雰囲気で楽しんでもらうこと。それを通じて地域性を感じ取って頂きながら、地域ブランドを醸成することと、設定した。レイアウト・内装・品揃え・什器、そしてそれらのデザインコンセプトもすべてマーケティング結果に基づいて決め、統一感を損なわぬよう、最新の注意をチーム全体で払う。

結果、全員経験が全くない運営スタッフで開業年から平均的道の駅の倍近い売上を達成することができた。

ただ、残念なことは、運営会主の第三セクターは首長が代表者だった。そのため、選挙で交代。事業開発時のマーケティングなど知る由もない。現場が混乱し始め、当初のコントラストが次第に失われてしまつていくのを目の当たりにして、公共的事業の事業継承の難しさを痛感せられている。

きただより111 弘前大学 地域社会研究会 上村 康之
『秋田県象潟への誘い／突然の町内会・班長デビュー』

この正月明け、秋田市からJR羽越線とバスを乗り継ぎ約1時間半程度の象潟（きさかた）の温泉に1泊した。象潟については、本ニュース224・きただより72（2019.8）で若干触れたが、羽越線沿線の日本海沿岸のまち（2005年に合併して「にかほ市」である。ここは松尾芭蕉が訪れた最北の地。1804年の鳥海山の大噴火・山体崩壊により、象潟の多島海は埋まってしまった。当時は松島と並ぶ景勝地であった。その象潟にあるA温泉ホテル。近年、改築したがこれまで3度宿泊。道の駅象潟「ねむの丘」を中心に、にかほ市の物販・飲食・観光インフォメーションなどの「にかほっと」、そして国道7号沿道であることもあり「ファミリーレストラン」「コンビニ」「ホームセンター」などができる、芭蕉が宿泊し句碑などもある「蚶満寺（かんまんじ）」や「九十九島」（かつての多島海のなごり）などがすぐ近くであるが、この15年?ほどの間に都市化されてしまった。

しかし、A温泉ホテルは象潟の旧市街地の北端にあってその歴史・旧道の散歩、砂浜の海水浴場、道路を挟んだ向かい側には日本海が拡がり、その激しい冬の波音が響き渡っていた。温泉には浴場が2つあり、そのうちの1つからはその日本海を眺めながら入浴ができる。1泊2食つきのプランで宿泊したが、「かに」がつかなく地魚などによる和食のコースであった（贅沢はあるが、北海道や日本海側の宿泊施設は、かにを売りにしているところが多い）。新潟からすると、特急いなほ号で約2時間40分である。

冬の象潟、派手さはないが「秋田のお気に入り」の場所の一つである。



筆者が住む町内会A班・班長を予定していた方の都合が悪く、突然昨年12月に筆者に決定。任期は1月から半年。まずは町内会費の徴収である（町内会については、本ニュース・きただより84(2021.8)など）。徴収予定世帯（集合住宅は除く）は35世帯、これ以外に住民登録なし2世帯、入会拒否1世帯、不明1世帯、空き家状態3世帯である。班長になる前にも数世帯は知ってはいたが、班内の全世帯を把握しているわけではなかった。今回、改めて高齢の一人暮らしの方、高齢ご夫婦の方々、耳や脚がご不自由な方々、家主がご病気で入院や福祉施設に入居された方、その他家庭の事情がある方など、状況は様々であるが。この町内会に住んで早や16年にもなる。すぐ近くなのに、通りが1本違うだけで「はじめまして」の方もいらした。しかし、当町内会A班はまだ何とか人のつながりもあるようだ。30代～40代のご家族も何世帯かあるが、小学校か中学校のP.T.Aの繋がりのようで、町内会の総会や会議など運営に関わっている。

この町内会に昭和40年代から50年代に入居された方、この頃はA班の婦人会でどこかのお店で歓迎会もあったそうである。筆者の地元である青森市の町内会でも平成の一桁の頃は、町内近くの仕出し店で歓迎会や忘年会があったそうだ。

町内でいろいろ役職をやられている方（70歳くらい）によると、2020年から2022年のコロナ禍で町内会総会も書面だけ、各行事もほとんど中止。あれで関係がかなり希薄になったと言っておられた。こういうところにもコロナ禍の影響が出ていていることを実感した。

任期は6月までと半年間ではあるが、町内会（班）の方を見かけたときには、積極的に挨拶やら声掛けしていきたいと思っている。

『過疎集落が取り組む地域再生への道 11』
(一社) しろにし 理事 白川 晶也

「役場はまたこんなハコモノを作つて…。まあ、建設業界には喜ばれるやうけどな」

いまから4年前の秋。当時役場勤めだった私が、改修工事が進む旧城山西小学校（現有田川町移住就業支援拠点施設“しろにし”）の状況をたまたま見に来たときのこと。現場で出会ったご老人の発したその言葉が今でも忘れられません。

しかし、地域のみなさんにそう思われるのも無理はないかもしません。批判を恐れずに言わせていただくと、特にこの地域では昭和の時代から公共施設・ハコモノの建設整備が多く行われてきました。そう感じたのは私だけではなく、初めてこの地を訪れた地域再生マネージャーの濱さん・矢部さんもしかり、きっと先のご老人もそうだったのでしょう。施設を整備したにもかかわらず、時を経て運営が立ち行かなくなり、閉館、倉庫化、荒廃、そして更地になつた例も少なくありません。どれほどの資金（税金）投下をしてきたことか。投資した分を直接的もしくは地域全体で回収したうえで、その役目を終えたならいいのですが…。

こんな施設があつたらいいな。そんなハコモノの建設整備がますありき、行政主導で事業が進められ、肝心の運営やソフトの部分は後回しで、地域側も行政依存・政治依存・ハコモノ依存の体質になってきてしまったのではないか。整備の前にまず地域側、自分たちで考える力がなくなってしまったのではないか。そんな気がしてなりません。

「役場は地域をどうしようと考えてるんや？」 旧知の目上の方に、そんな問い合わせを投げかけられました。「それを考えるのって、まずは自分たちと違うん??」と、その時かなりのモヤモヤを感じました。今から思えば、そのすべてが繋がっていて、自分が感じていた違和感は間違ひではなかつたんだと思います。

そんな地域の状況のなか2年前に開業した弊社施設ですが、地域から見る目はやはり「ハコモノ」でした。「廃校を改修してカフェができたらいい」…周辺地域からの視線は、99%がそんな見方でした。（確かに走りながら考えていたことも否めませんが（笑））『中間支援組織』として認知され始めたのは、開業後1年半を経過したころ。少しづつ、地域からの依頼や相談ごとが増えてきたのです。



『相模の国から ~大魔神のたび~』 エジプトへの旅 2025.12/19~28 茨城県境町 参与 溝口 久

2025年を締めくくる最後のツアーはエジプト。成田を12月19日(木)20時に出発するはずが、22時半へと大幅な遅延。その待ち時間にラウンジを梯子し、シャワーを浴びて心身を整え、ようやく機上の人となった。エジプト航空の機内にアルコールはない。13時間のフライトの末、カイロからルクソールへのトランジットを待つ間、「難易度が高い」と言われるこの国でどんな旅が待っているのか、心地よい緊張感が胸をかすめた。

今回の旅には、観光だけではなく「使命」がある。世界中の子どもたちが描いた絵を繋ぎ合わせ、一枚の巨大な作品にするプロジェクト**「世界一大きな絵2025」**。大阪万博でも披露されたこの平和の表現をルクソール、アスワン、カイロ、アレキサンドリアの各地で展示して回るのだ。

初日、カルナック神殿を背に5m四方の布に描かれた子どもたちの絵が25枚、広場を彩った。ルクソール市長も列席する式典があった。エジプト・日本学校の子供たちが日本とエジプトをイメージした絵を持って、笑顔で一緒に写真を撮ろうと寄ってくる。外国人に対して親しみを持ってアプローチしてくる姿が驚きだし、日本の子供たちもこうあったらいいなと思わずにはおられなかった。ちなみにこの「エジプト・日本学校」は、現地の公立学校でありながら、日本の教育モデルを導入している画期的な学校だ。2016年にエルシーシ大統領が訪日した際、日本の学校における「規律」「協調性」「掃除の習慣」に感銘を受けたことがきっかけで誕生した。現在ではエジプト全土に50校以上が展開され、入学希望者が殺到する人気校となっている。

絵の撤収後、ナイル川クルーズ船にチェックイン。その後に「ルクソール・エジプト公立図書館に向かった。交流会が用意されていた。茨城県境町と、プロジェクトを支援する「坂東太郎」(境町に本社)についてスピーチをしてくれという。通訳がいるとはいえ、ここはエジプト、アラビア語は到底無理としてもせめて英語でと予め英文を用意しておいた。ただ、読み方いい加減な単語もあり3分弱の時間は長かった。図書館長からは記念の飾り皿を贈られた。**寄贈 ルクソール・エジプト公立図書館は、閣下に対し「卓越と創造の盾」を授与することを光栄に存じます。閣下の益々のご発展、繁栄、向上、そして成功と幸運を心よりお祈り申し上げます。成功の守護者たる神と共に。**とアラビア語で書かれていた。そして館長からは図書館と境町、さらにはルクソール市との今後の縁組みについても前向きなお話をいただいた。

翌朝、冬至。カルナック神殿で私たちは貴重な光景を目にした。4000年以上前、古代エジプト人は冬至の日の出が神殿の中心軸を真っ直ぐに貫くよう、数センチ

狂いもなくこの巨大建造物を設計した。冬至は太陽神ラーが再び力を取り戻す「誕生の日」。その光を浴びるために、国内外から多くの人が集っていた。

このカルナック神殿にはとにかく圧倒された。世界最大神殿の建設は中王国時代(紀元前2000年頃)から始まり、プトレマイオス朝時代に至るまでの約2000年間にわたり、歴代のファラオたちが次々と増改築を繰り返した。ラムセス2世やセティ1世といった名だたる王たちが、「神への忠誠」と「自らの権威」を示すために、新しい門や塔、巨大な柱を継ぎ足していく結果、迷宮のような広大な複合神殿となった。神殿は134本もの巨大な石柱が林立する大列柱室。最大の柱は高さ21m、円周10mになる。柱の表面には、かつて鮮やかに彩色されていた精緻なヒエログリフ(象形文字)が刻まれており、神々と王の交流が今もなお語り継がれている。どうやって造ったのかが最大の関心事だ。

まずは、巨大な石をどうやって運んだか?石材の多くは、数百キロ離れたアスワンなどの石切り場から切り出され、その巨石はナイル川が増水する時期を待って、巨大な筏に載せて運ばれた。陸揚げされた石は、木製のそりに載せられ引かれ、この際そりの前の砂に水を撒いて摩擦を減らしていた。

次はどうやって高く積み上げたか?彼らが使ったのは「土と砂」だ。石を一段積むごとに、その高さに合わせて日干しレンガや砂で緩やかなスロープを作りドラム状に切り出した石を運び上げ、次の石を積むためにスロープを延長する。これを繰り返して神殿やピラミッドを高くしていった。建設中の神殿は、全体が巨大な土の山に埋もれたような状態だった。完成後にその土を取り除きながら柱表面のヒエログリフを「上から下へ」彫り込んでいく、ようやく壯麗な姿が現れる。

今我々が目にするカルナック神殿は、東京ドーム数個分という広大な敷地だが、4000年前の「もとの神殿」は、その中心部にある「至聖所」とその周辺の小さな中庭だけだった。この規模であれば、熟練の職人集団と数千人の農民がいれば、5~10年という「王の治世の初期」のうちに完成させることができた。石の切り出しに1~2年、運搬にはナイル川の増水期の「夏から秋」4ヶ月×数年、柱を立てるのに1.2年、屋根を架けるのに1.2年、仕上げの彫刻に2,3年程かかっている。

(つづく)

